

注 意 事 項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを(例1)では一つ、(例2)では二つ選び答案用紙に記入すること。

(例1) 101 県庁所在地
はどれか。

- a 栃本市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

(例2) 102 県庁所在地はどれか。
2つ選べ。

- a 宇都宮市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

(例1)の正解は「c」であるから答案用紙の

101 ☐a ☐b ☒c ☐d ☐e のうち ☒c をマークして
101 ☐a ☐b ☒c ☐d ☐e とすればよい。

(例2)の正解は「a」と「c」であるから答案用紙の

102 ☒a ☐b ☒c ☐d ☐e のうち ☒a と ☒c をマークして
102 ☒a ☐b ☒c ☐d ☐e とすればよい。

- (2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。
 良い解答の例…… ☒ (濃くマークすること)
 悪い解答の例…… ☐ ☐ (解答したことにならない。)
- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「☒」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。
- (4) ア.(例1)の質問には二つ以上解答した場合は誤りとする。
 イ.(例2)の質問には一つ又は三つ以上解答した場合は誤りとする。
- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 34歳の初妊婦。妊娠34週の妊婦健康診査のため来院した。現在までの妊娠経過に異常を認めない。身長160 cm、体重65 kg(非妊時55 kg)。血圧120/84 mmHg。子宮底長30 cm。下肢に軽度の浮腫を認める。尿所見：蛋白(－)、糖(－)。超音波検査所見：羊水量正常、第1骨盤位、胎児推定体重2,300 g。超音波検査が終了するころに、患者は次第に息苦しさや嘔気とを訴えるようになった。

まず行うのはどれか。

- a 左側臥位
- b 胸部聴診
- c 酸素投与
- d 静脈路確保
- e ノンストレステスト

2 32歳の初妊婦。妊娠36週の妊婦健康診査のため来院した。身長155 cm、体重65 kg(非妊時50 kg)。血圧160/90 mmHg。子宮底長26 cm。下腿に浮腫を認める。尿所見：蛋白1＋、糖(－)。超音波検査で胎児の推定体重は2,100 gであり、2週前と変化はない。胎児の大横径は正常範囲であるが、腹囲は基準値より小さく羊水過少である。超音波ドプラ検査で胎児の脳への血流量の相対的増加を認める。

この患者で誤っているのはどれか。

- a 重症妊娠中毒症である。
- b 胎児胎盤機能不全である。
- c 胎動は減少する。
- d 変動一過性徐脈が発生しやすい。
- e 前期破水が発生しやすい。

3 45歳の女性。肝障害のため入院した。20年ぐらい前から、ほぼ毎日飲酒するようになった。最近はウイスキーの760 ml ビンを2日で空けるといふ。入院2日目から夜間に不眠となり、点滴を自分で抜くなど不穏となった。

予想される症候はどれか。

- (1) 手指振戦
- (2) 思考散乱
- (3) パニック発作
- (4) 体系的妄想
- (5) 記憶力障害

- a (1)、(2)、(3) b (1)、(2)、(5) c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4) e (3)、(4)、(5)

4 72歳の女性。75歳の夫と娘夫婦とに伴われて来院した。3か月前ころから「夫が浮気をしている」と疑いだした。ことあるごとに夫を責めるが、家族によれば浮気の事実はない。夫が買い物に出かけ、帰宅が遅れると「女性と会っていた」と激しく夫を責める。そのことで口論になるとますます激しく興奮する。近くに住む娘夫婦が仲介に入るが、全く聞く耳を持たず、夫が浮気をしていることを強く信じて疑わない。興奮すると夜も眠らずに、夫を責め続けるという。また、物忘れが急に進んだようだと言ふ。身体疾患、薬物乱用およびアルコール乱用歴はない。

考えられるのはどれか。

- (1) 統合失調症
- (2) 妄想性障害
- (3) Alzheimer 病
- (4) 急性一過性精神病性障害
- (5) 統合失調感情障害 (分裂感情障害)

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

5 56歳の男性。日中の眠気と夜間に熟眠感が得られないことを主訴に来院した。1年近く同様の症状を自覚していたが、最近日中の眠気がさらに強まり、仕事中に突然居眠りするようになったという。既往歴に特記すべきことはない。身長160 cm、体重96 kg。尿所見：蛋白(－)、糖(－)。血清生化学所見：総コレステロール180 mg/dl、トリグリセライド380 mg/dl。心電図に異常はない。

診断に最も有用なのはどれか。

- a 脳SPECT
- b 安静時脳波
- c 頭部単純MRI
- d 動脈血ガス分析
- e 終夜睡眠ポリグラフィ

6 36歳の男性。両側下腿の潰瘍を主訴に来院した。10日前から両側下腿に小膿疱が出現、集簇・融合して、その後潰瘍を形成、急速に拡大した。潰瘍の辺縁は堤防状に隆起し、圧痛と自発痛とがある。関節痛を伴う。体温37.2℃。血液所見：赤血球452万、Hb14.0 g/dl、Ht42%、白血球9,800(桿状核好中球7%、分葉核好中球67%、好酸球2%、好塩基球1%、単球3%、リンパ球20%)、血小板19万。下腿の写真(別冊No. 1)を別に示す。

合併症の好発臓器はどれか。

- a 中枢神経
- b 肺
- c 腸管
- d 肝臓
- e 腎臓

別冊
No. 1 写真

7 65歳の女性。顔面の皮疹を主訴に来院した。半年前から顔面の痒みに対し、近医で処方された外用薬による治療を受けていた。最近、その外用薬に反応しない皮疹が出現し、増悪してきた。顔面の写真(別冊No. 2)を別に示す。

使用していた可能性が高い外用薬はどれか。

- a 抗真菌薬
- b 免疫抑制薬
- c ビタミンD₃薬
- d 抗ヒスタミン薬
- e 副腎皮質ステロイド薬

別 冊
No. 2 写 真

8 4歳の女児。発疹を主訴として来院した。前胸部と腹壁とに発赤と水疱とを伴う発疹を認める。発疹の数は増加し、分布も拡大してきている。通園している幼稚園で同様の発疹を認める児が数人いるという。上腹部の写真(別冊No. 3)を別に示す。

適切な処置はどれか。

- a アルコール消毒
- b 抗菌薬服用
- c 抗ウイルス薬服用
- d 抗ヒスタミン薬服用
- e 副腎皮質ステロイド薬軟膏塗布

別 冊
No. 3 写 真

9 70歳の女性。右眼の眼痛と視力低下とを主訴に来院した。20年前に右眼の白内障手術と前房眼内レンズ挿入術とを受けている。1年前から徐々に視力が低下し、眼痛も出てきている。視力は右0.01(矯正不能)、左0.6(矯正不能)。眼圧は右19 mmHg、左15 mmHg。右眼の前眼部写真(別冊No. 4)を別に示す。

右眼で考えられるのはどれか。

- a 角膜ヘルペス
- b 角膜ジストロフィ
- c 角膜辺縁潰瘍
- d 水疱性角膜症
- e 角膜細菌感染症

別 冊
No. 4 写 真

10 62歳の男性。左眼の視力低下を訴えて来院した。6か月前から左眼の変視症を自覚している。視力は右0.8(矯正不能)、左0.04(矯正不能)。左右眼に初発白内障がみられる。眼圧は右14 mmHg、左15 mmHg。右眼底に異常を認めない。左眼の眼底写真(別冊No. 5)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 糖尿病網膜症
- b 加齢黄斑変性
- c 網膜中心静脈閉塞症
- d 脈絡膜悪性黒色腫
- e Vogt-小柳-原田症候群

別 冊
No. 5 写 真

11 40歳の男性。耳鳴を訴えて来院した。昨日30kgの荷物を持ち上げたところ、右耳でポンという音が聞こえた。以後、右耳鳴、右難聴およびめまいが出現し、特に右側臥位で強くなるという。左向き水平回旋混合性眼振を認める。オーディオグラム(別冊No. 6)を別に示す。

診断はどれか。

- a 中毒性難聴
- b 突発性難聴
- c 外リンパ瘻
- d Ménière 病
- e 良性発作性頭位眩暈症

別 冊
No. 6 図

12 22歳の女性。発熱と摂食困難とで来院した。5日前から咽頭痛と39.0℃の発熱とがあり、近医で処方された抗菌薬と解熱鎮痛薬とを内服している。口蓋垂は右側に偏位し、左軟口蓋から前口蓋弓にかけて発赤と腫脹とが著明である。

診断はどれか。

- a 扁桃肥大症
- b 伝染性単核球症
- c 扁桃周囲膿瘍
- d 中咽頭癌
- e 悪性リンパ腫

13 45歳の男性。昨日、工事現場で鉄パイプをハンマーで打っていたところ、右眼に火花が飛入したように感じ、視力障害が出現したので来院した。細隙灯顕微鏡検査で右眼の角膜に穿孔創と白内障とを認める。

この患者の検査で最も適切なのはどれか。

- a 視野検査
- b 光覚(暗順応)検査
- c 網膜電図(ERG)
- d 頭部単純CT
- e 頭部単純MRI

14 72歳の男性。労作時呼吸困難を主訴に来院した。20本/日、40年間の喫煙歴がある。身体所見では、両側肺野で呼吸音の減弱を認めるが、ラ音は聴取しない。胸部エックス線写真(別冊No. 7A)と胸部単純CT(別冊No. 7B)とを別に示す。

低下が予想されるのはどれか。2つ選べ。

- a 残気量
- b 1秒率
- c 全肺気量
- d 肺拡散能
- e 機能的残気量

別 冊
No. 7 写真A、B

15 56歳の男性。自動車整備工。咳嗽と労作時呼吸困難とを主訴に来院した。症状は2年ほど前から出現し、徐々に増悪している。15本/日、30年間の喫煙歴がある。胸部エックス線写真(別冊No. 8A)と気管支肺胞洗浄液 May-Giemsa 染色標本(別冊No. 8B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 石綿肺
- b 珪肺症
- c 過敏性肺臓炎
- d 特発性肺線維症
- e 慢性閉塞性肺疾患

別 冊
No. 8 写真A、B

16 74歳の男性。健康診査で胸部エックス線写真上の異常陰影を指摘された。呼吸数22/分。脈拍88/分、整。血圧136/88 mmHg。顔面と頸部とに異常を認めない。胸部の打診と聴診とでは異常を認めない。胸部エックス線写真正面像(別冊No. 9A)と側面像(別冊No. 9B)とを別に示す。

可能性が低いのはどれか。

- a 奇形腫
- b 胸腺腫
- c 悪性リンパ腫
- d 神経原性腫瘍
- e 異所性甲状腺腫

別 冊
No. 9 写真A、B

17 40歳の男性。文筆業。突然の呼吸困難と胸痛とのため救急車で搬送された。本日は一日中机に向かい原稿を書いていた。原稿が出来上がり椅子から立ち上がった直後に呼吸困難と胸痛とが出現した。身長156 cm、体重85 kg。脈拍120/分、整。血圧90/50 mmHg。意識軽度混濁。顔面蒼白。血液所見：白血球12,500、血清FDP 50 μ g/ml(基準10以下)、Dダイマー15.0 μ g/ml(基準1.0以下)。CK 40単位(基準10~40)。CRP 3.1 mg/dl。胸部造影CT(別冊No. 10)を別に示す。

この患者で認めるのはどれか。

- (1) 上行大動脈瘤
- (2) 下行大動脈解離
- (3) 肺動脈拡大
- (4) 肺動脈内造影欠損
- (5) 胸水貯留

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別 冊
No. 10 写真

18 23歳の女性。30分前に突然出現した動悸のため来院した。意識清明。呼吸数20/分。血圧102/66 mmHg。心雑音なく、肺野にラ音を認めない。来院時の心電図(別冊No. 11)を別に示す。

適切な治療薬はどれか。

- (1) リドカイン
- (2) ドパミン
- (3) ジギタリス
- (4) ベラパミル
- (5) アトロピン

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別 冊
No. 11 図

19 33歳の男性。労作時の息切れと疲労感を主訴に来院した。2年前から同症状で入退院を繰り返している。意識は清明。脈拍96/分、整。血圧112/72 mmHg。胸部聴診でⅢ音を聴取するが、心雑音は聴取しない。両肺野にラ音を聴取しない。顔面と下腿とに浮腫を認める。胸部エックス線写真での心胸郭比78%。心カテテル検査で左室拡張末期圧16 mmHg。冠動脈に狭窄はなく、左室造影で左室駆出率は20%(基準60~80)、左室拡張末期容積は268 ml/m²(基準54~89)。

治療薬として適切なものはどれか。

- (1) 利尿薬
- (2) カルシウム拮抗薬
- (3) α 遮断薬
- (4) β 遮断薬
- (5) アンジオテンシン変換酵素阻害薬

a (1)、(2)、(3) b (1)、(2)、(5) c (1)、(4)、(5)
d (2)、(3)、(4) e (3)、(4)、(5)

20 25歳の女性。発熱と易疲労感を主訴に来院した。2か月前に歯科治療を受けた。1か月前から連日37℃台の発熱があり、近医で抗菌薬による治療を受けていた。2週前から労作時の息切れが出現するようになった。意識は清明。身長160 cm、体重45 kg。体温38.3℃。脈拍96/分、整。血圧88/52 mmHg。顔色不良。心尖部に4/6度の収縮期雑音を聴取する。血液所見：赤血球340万、Hb 9.8 g/dl、Ht 32%、白血球12,000(桿状核好中球12%、分葉核好中球65%、単球7%、リンパ球16%)、血小板8万。心エコー図(別冊No. 12)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 僧帽弁狭窄症
- b 僧帽弁閉鎖不全症
- c 大動脈弁狭窄症
- d 大動脈弁閉鎖不全症
- e 三尖弁閉鎖不全症

別 冊
No. 12 写 真

21 68歳の男性。胸痛のため来院した。6か月前から前胸部痛を自覚するようになった。胸痛は2～3分持続し、安静で軽快した。喫煙歴は20本/日、45年。身長162cm、体重60kg。脈拍76/分、整。血圧120/60mmHg。血液所見：赤血球507万、Hb15.3g/dl、Ht45%、白血球4,500、血小板18万。血清生化学所見：総蛋白7.0g/dl、アルブミン4.2g/dl、AST17単位、ALT15単位、LDH188単位(基準176～353)、CK22単位(基準10～40)。冠動脈造影写真(別冊No. 13A)と運動負荷直後および4時間後のタリウム心筋SPECT垂直面長軸断層像(別冊No. 13B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 異型狭心症
- b 労作性狭心症
- c 不安定狭心症
- d 急性心筋梗塞
- e 陳旧性心筋梗塞

別 冊
No. 13 写真A、B

22 18歳の男子。近医で高血圧を指摘されたため来院した。血圧は3年前まで正常であった。両親と兄弟ともに高血圧はない。脈拍76/分、整。血圧184/104mmHg、左右差はない。心雑音なく、肺野にラ音を認めない。腹部に血管雑音を聴取する。血漿レニン活性4.6ng/ml/時間(基準1.2～2.5)。尿中カテコラミン正常。

診断の確定に有用なのはどれか。

- (1) 心エコー検査
- (2) レノグラフィ
- (3) 腎動脈造影
- (4) MIBGシンチグラフィ
- (5) グルカゴン負荷試験

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

23 56歳の女性。突然の強い胸背部痛のため救急車で搬送された。10年前から高血圧の治療を受けている。脈拍92/分、整。上肢の血圧180/92mmHg。下肢は冷たく、脈拍は微弱である。血液所見：赤血球360万、Hb10.2g/dl、Ht31%。胸部造影CT(別冊No. 14)を別に示す。

この疾患に合併するのはどれか。

- (1) 心タンポナーデ
- (2) 冠動脈閉塞
- (3) 心室中隔穿孔
- (4) 僧帽弁閉鎖不全
- (5) 大動脈弁閉鎖不全

a (1)、(2)、(3) b (1)、(2)、(5) c (1)、(4)、(5)
d (2)、(3)、(4) e (3)、(4)、(5)

別 冊
No. 14 写 真

24 28歳の男性。空腹時の上腹部痛のため来院した。数年前から同様の症状が出現していたが、市販薬を適宜服用していた。体重減少はみられない。右上腹部に圧痛を認める。便潜血反応は陰性。血液所見と血清生化学所見とに異常を認めない。十二指腸内視鏡写真(別冊No. 15)を別に示す。迅速ウレアーゼ試験を行ったところ陽性であった。

治療薬として適切なのはどれか。

- (1) 抗コリン薬
- (2) プロトンポンプ阻害薬
- (3) アモキシシリン
- (4) クラリスロマイシン
- (5) バンコマイシン

- a (1), (2), (3) b (1), (2), (5) c (1), (4), (5)
d (2), (3), (4) e (3), (4), (5)

別冊
No. 15 写真

25 日齢5の新生児。昨日から胆汁性の嘔吐を認める。在胎40週、出生体重2,960g。胎便排泄が認められなかったため、24時間後にグリセリン浣腸を行ったところ暗緑色の胎便が勢いよく噴出した。その後に移行便の排泄がなく、次第に腹部が膨隆してきた。腹部エックス線単純写真臥位像(別冊No. 16)を別に示す。

診断に有用なのはどれか。

- (1) 腹部超音波検査
- (2) 上部消化管造影
- (3) 直腸鏡検査
- (4) 注腸造影
- (5) 直腸生検

- a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3) d (3), (4) e (4), (5)

別冊
No. 16 写真

26 68歳の男性。今朝突然、腹痛と下血とをきたしたため来院した。身長165 cm、体重59 kg。呼吸数24/分。脈拍76/分、整。血圧132/90 mmHg。腹部は平坦、軟で、左下腹部に圧痛を認める。血液所見：赤血球385万、Hb12.2 g/dL、Ht35%、白血球9,900、血小板26万。CRP2.2 mg/dL。大腸内視鏡写真(別冊No. 17)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 大腸憩室症
- b Crohn病
- c 潰瘍性大腸炎
- d 大腸癌
- e 虚血性大腸炎

別冊
No. 17 写真

27 45歳の女性。1か月前から倦怠感が出現したため来院した。飲酒歴なし。身長153 cm、体重68 kg。肝・脾を触知しない。血清生化学所見：総コレステロール230 mg/dL、トリグリセライド140 mg/dL、総ビリルビン0.8 mg/dL、AST85単位、ALT130単位、アルカリホスファターゼ275単位(基準260以下)、 γ -GTP85単位(基準8~50)。免疫学所見：HBs抗原陰性、HCV抗体陰性、抗核抗体陰性、抗ミトコンドリア抗体陰性。腹部超音波写真(別冊No. 18)を別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- a 薬物では起こらない。
- b 糖尿病に合併しやすい。
- c 肝硬変に高率に移行する。
- d 肝細胞癌は合併しない。
- e 副腎皮質ステロイド薬が有効である。

別冊
No. 18 写真

28 58歳の男性。腹部超音波検査で初めて肝に孤立性腫瘤を指摘され入院した。3年前に上行結腸癌で右半結腸切除術を受け、術後定期的に通院していた。血液所見：赤血球385万、Hb 11.5 g/dl、白血球4,200、血小板14万。血清生化学所見：総蛋白7.0 g/dl、アルブミン3.1 g/dl、ZTT 13.0(基準4.0~14.5)、総ビリルビン0.9 mg/dl、AST 32単位、ALT 28単位、アルカリホスファターゼ350単位(基準260以下)、 γ -GTP 48単位(基準8~50)。免疫学所見：HBs抗原陰性、HCV抗体陰性、AFP 8 ng/ml(基準20以下)、CEA 22 ng/ml(基準5以下)。腹部造影CTで肝左葉に径4 cmの腫瘤陰影を1個認めるが、肺を含めその他の臓器には異常を認めない。

適切な治療方針はどれか。

- a 経過観察
- b 経皮的エタノール注入療法
- c 放射線治療
- d 免疫療法
- e 肝部分切除

29 60歳の女性。1週間前から上腹部痛が出現したため来院した。腹部は平坦であるが、心窩部に圧痛を認める。血清生化学所見：総ビリルビン1.4 mg/dl、AST 65単位、ALT 75単位、アルカリホスファターゼ1,250単位(基準260以下)、 γ -GTP 450単位(基準8~50)。CA19-9 265 U/ml(基準37以下)。ERCP写真(別冊No. 19 A、B)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 肝門部胆管癌
- b 胆嚢癌
- c 総胆管癌
- d 膵頭部癌
- e 十二指腸乳頭部癌

別 冊
No. 19 写真A、B

30 48歳の女性。1か月前から続く腹部膨満のため入院した。腹部超音波検査で多量の腹水が疑われ、腹腔穿刺を行ったが、検体を採取できなかった。腹腔鏡検査で腹腔内に大量の粘液貯留が認められた。

原発臓器として考えられるのはどれか。

- (1) 胆 嚢
- (2) 膵 臓
- (3) 虫 垂
- (4) 卵 巣
- (5) 子 宮

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

31 64歳の男性。突然、腹痛と嘔吐とが出現し、増強してきたため来院した。腹痛は持続性である。8年前、胃癌のため幽門側胃切除術を受けている。顔面は蒼白である。腸雑音は消失し、腹部に筋性防御を認める。血液所見：赤血球382万、Hb 11.6 g/dl、Ht 34%、白血球16,000。血清生化学所見：尿素窒素30 mg/dl、LDH 1,000単位(基準176~353)、CK 230単位(基準10~40)。腹部エックス線単純写真(別冊No. 20)を別に示す。

治療として適切なのはどれか。

- a 抗コリン薬投与
- b 緩下薬投与
- c 高圧浣腸
- d 内視鏡的整復
- e 開腹手術

別冊
No. 20 写真

32 10歳の女兒。顔色蒼白と息切れとを主訴に来院した。4か月前から徐々に顔色が蒼白になり、動作時に息切れがある。成長発達は正常。体温37.0℃。呼吸数30/分。脈拍92/分、整。皮膚蒼白。前胸部と下肢とに点状出血を認める。胸骨左縁で2/6度の収縮期雑音を聴取する。呼吸音は正常である。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。尿所見：蛋白(—)、糖(—)。血液所見：赤血球215万、Hb 6.5 g/dl、Ht 19%、白血球2,100(好中球30%)、血小板2.6万。血清生化学所見：総蛋白6.1 g/dl、アルブミン3.2 g/dl、クレアチニン0.6 mg/dl、尿酸3.2 mg/dl、AST 19単位、ALT 14単位、LDH 265単位(基準176~353)。骨髓血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 21)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 再生不良性貧血
- b 急性骨髄性白血病
- c EBウイルス感染症
- d パルボウイルス感染症
- e 特発性血小板減少性紫斑病

別冊
No. 21 写真

33 24歳の女性。四肢の紫斑と歯肉出血とのため来院し、当日入院した。3日前に手足の紫斑に気づき、1日前から歯肉出血が止まらなかった。意識は清明。体温37.5℃。脈拍88/分、整。血圧106/56 mmHg。上腕と下腿との皮膚に点状出血と、径1 cmの紫斑とが散在している。眼瞼結膜は蒼白。口腔内では歯肉の出血と頬粘膜の点状出血とを認める。腹部は平坦、軟で、肝・脾は触知しない。血液所見：赤血球290万、Hb 8.7 g/dl、Ht 28%、白血球5,600、血小板1.2万、フィブリノゲン120 mg/dl (基準200~400)、血清FDP 34 μg/ml (基準10以下)。血清生化学所見：総蛋白6.7 g/dl、アルブミン4.3 g/dl、尿素窒素22 mg/dl、クレアチニン1.3 mg/dl、尿酸8.8 mg/dl、総コレステロール130 mg/dl、総ビリルビン0.8 mg/dl、AST 38単位、ALT 35単位、LDH 520単位 (基準176~353)。骨髓血塗抹 May-Giemsa 染色標本 (別冊No. 22) を別に示す。

治療薬として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a シクロスポリン
- b アントラサイクリン
- c L-アスパラギナーゼ
- d 副腎皮質ステロイド薬
- e 全トランス型レチノイン酸

別 冊
No. 22 写 真

34 3歳の男児。10日間続く発熱を主訴に来院した。病初期に咳が強く、マイコプラズマ肺炎と診断されて治療を受けた。咳は少なくなり、胸部エックス線写真で所見はほぼ正常化した。39℃前後の発熱が続いている。発疹はない。心雑音はない。肺野にラ音を聴取しない。右肋骨弓下に肝を2 cm 触知する。血液所見：赤血球330万、Hb 11.8 g/dl、白血球3,200、総鉄結合能 (TIBC) 380 μg/dl (基準290~390)。血清生化学所見：AST 238単位、ALT 307単位、Fe 75 μg/dl。骨髓有核細胞数35,500/μl。骨髓血塗抹 May-Giemsa 染色標本 (別冊No. 23) を別に示す。

この患児の血中で増加するのはどれか。2つ選べ。

- a 血小板
- b フィブリノゲン
- c フェリチン
- d 総コレステロール
- e LDH

別 冊
No. 23 写 真

35 55歳の女性。3か月前から下腿浮腫が出現してきたため来院した。15年前から関節リウマチに罹患し、3年前から金製剤で治療されている。尿所見：蛋白3+、糖(-)、潜血(-)、尿蛋白5.5 g/日。血清生化学所見：総蛋白5.0 g/dl、尿素窒素12 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、総コレステロール385 mg/dl。

考えられる腎病変はどれか。2つ選べ。

- a 膜性腎症
- b 腎乳頭壊死
- c 腎皮質壊死
- d 紫斑病性腎炎
- e アミロイド腎症

36 51歳の男性。透析導入を目的として入院した。血清クレアチニン12.0 mg/dl。
腹部単純CT(別冊No. 24)を別に示す。

この患者で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 両親のどちらかがこの疾患をもつ。
- b 患者の娘はこの疾患を発症しない。
- c 脳動脈瘤を合併する。
- d 腎移植の適応がない。
- e 腹膜透析が第一選択となる。

別 冊
No. 24 写 真

37 28歳の男性。性交渉後、排尿痛と尿道からの黄色膿汁の排泄が出現したため近
医を受診し、淋菌性尿道炎と診断された。アンピシリンを7日間投与され、症状は
軽減したが、尿道に違和感があり粘液性の分泌物の排泄が続くため来院した。陰
茎、陰囊内容、両側鼠径部および前立腺に異常を認めない。尿所見：蛋白(－)、糖
(－)、沈渣に白血球3～4/1視野。分泌物のGram染色で白血球2～3/1視野、細
菌(－)。

淋菌の他に感染していたと考えられる病原微生物はどれか。

- a *Treponema pallidum*
- b *Haemophilus ducreyi*
- c *Wuchereria bancrofti*
- d *Chlamydia trachomatis*
- e *Calymmatobacterium granulomatis*

38 70歳の男性。排尿困難に加えて両側鼠径部のしこりが自壊し、悪臭と滲出物と
が増えてきたため来院した。生来包茎であった。半年前から陰茎亀頭部が腫れてき
たが、痛みがないので放置していた。陰茎や鼠径部に痛みはない。尿所見：蛋白1
＋、糖(－)、潜血2＋、沈渣に赤血球5～10/1視野、白血球50～100/1視野、桿菌
2＋。血液所見に異常を認めない。CRP6.0 mg/dl。

この患者で高値となるのはどれか。

- a CA125
- b CA19-9
- c CEA
- d hCG-β
- e SCC

39 28歳の女性。未婚、未妊。不正性器出血を主訴に来院した。子宮頸部細胞診
クラスIV。コルポスコピー下狙い生検の病理組織H-E染色標本(別冊No. 25)を別
に示す。

この患者の治療として適切なのはどれか。

- a 子宮頸部円錐切除術
- b 単純子宮全摘術
- c 広汎子宮全摘術
- d 放射線治療
- e 化学療法

別 冊
No. 25 写 真

40 21歳の女性。原発性無月経を主訴に来院した。体型は女性型で乳房発育は良好である。両側の鼠径部に小腫瘤を触知する。陰毛は少ないが、陰の形成が認められる。染色体検査は46,XYである。

この患者で正しいのはどれか。

- a 女性半陰陽
- b テストステロン分泌低下
- c アンドロゲン受容体異常
- d 2相性の基礎体温
- e 卵管の存在

41 50歳の女性。6か月前からの顔面紅潮、発汗および不眠を主訴に来院した。閉経49歳。血圧128/62 mmHg。全身の身体所見と内診所見とに明らかな異常はなく、子宮頸部と内膜細胞診とも異常を認めない。血中ホルモン値：LH 32.0 mIU/ml (基準 卵胞期 1.8~7.6)、FSH 65.0 mIU/ml (基準 卵胞期 5.2~14.4)、プロラクチン 4.0 ng/ml (基準 15以下)、エストラジオール 10 pg/ml 以下 (基準 卵胞期 11~230)。

治療として適切なのはどれか。

- a 偽閉経療法
- b ホルモン補充療法
- c 抗エストロゲン療法
- d ギナドトロピン療法
- e プロモクリプチン療法

42 55歳の男性。歩道を歩行中に突然右上下肢に脱力が生じ、思うように言葉がしゃべれなくなったため、救急車で搬送された。10年前から会社の健診で高血圧症、高脂血症および心房細動を指摘されていたが、特に薬物治療を受けていなかった。来院時の意識はJCSでII-10。身長160 cm、体重76 kg。体温36.8℃、呼吸数18/分。脈拍96/分、不整。血圧180/100 mmHg。皮膚色は正常。貧血と黄疸とはない。胸部でラ音を聴取しない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。右片麻痺と失語とを認める。頭部単純CTで左被殻部に径2 cmの高吸収域を認めたため、緊急入院した。血液所見：赤血球460万、Hb 12.0 g/dl、白血球6,200、血小板23万。血清生化学所見：総蛋白6.5 g/dl、アルブミン4.4 g/dl、尿素窒素18 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、総コレステロール290 mg/dl、トリグリセライド180 mg/dl、AST 26単位、ALT 20単位、Na 139 mEq/l、K 4.1 mEq/l。入院から3日間、絶食と安静とを保ち経過を観察した。意識は清明になった。右片麻痺と失語症との程度は入院時に比べて変化していない。第2、3病日の血圧は130~140/80~90 mmHgで安定している。

この時点での治療として最も適切なのはどれか。

- a 血腫除去術を行う。
- b 抗凝固療法を開始する。
- c 降圧薬を開始する。
- d 高脂血症治療薬を開始する。
- e リハビリテーションを開始する。

43 9歳の女兒。右上下肢の脱力発作を主訴に来院した。半年前から2週に一度ほどの頻度で、フルートの練習中に右上下肢の脱力をきたし、それが30分ほどで軽快していた。生来健康であった。意識は清明。身長133 cm、体重30 kg。体温36.4℃。血圧120/74 mmHg。皮膚色は正常。貧血と黄疸とはない。胸部でラ音を聴取しない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。神経系の診察で明らかな異常を認めない。頭部MRIで異常を認めたので入院の上、脳血管造影を施行した。頭部単純MRIのT₂強調像(別冊No. 26A)と左内頸動脈造影側面写真(別冊No. 26B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

- a もやもや病
- b 脳動静脈奇形
- c 多発性硬化症
- d 複雑部分発作
- e Sturge-Weber 症候群

別 冊
No. 26 写真A、B

44 24歳の女性。1週前から夕方になると時々ものが二重に見えるようになり来院した。3年前からBasedow病で内服薬で治療中である。意識は清明。身長158 cm、体重54 kg。体温36.6℃。呼吸数18/分。脈拍104/分、整。血圧120/78 mmHg。皮膚色は正常。貧血と黄疸とはない。胸部でラ音を聴取しない。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。下肢に浮腫を認めない。四肢筋萎縮はないが徒手筋力テストは眼輪筋4、頸部屈筋3および三角筋3である。深部(腱)反射は正常。感覚障害、小脳症状および自律神経障害は認めない。

この患者でみられないのはどれか。

- a 筋の易疲労性
- b 末梢神経伝導速度正常
- c テンシロンテスト陽性
- d 誘発筋電図でのwaxing現象
- e 抗アセチルコリンレセプター抗体陽性

45 28歳の女性。右下腿の激痛と歩行困難とを主訴に来院した。数年前から時々腰痛と右殿部痛とがあり、腰椎椎間板ヘルニアの診断を受けていた。今朝、顔を洗おうとしたとき、突然右下肢に激痛が走り動けなくなった。昨夜から排尿がない。右足外側に痛覚の脱失と触覚の鈍麻とがある。右アキレス腱反射は消失、右腓骨筋の筋力は2である。

緊急手術の理由となる症候はどれか。

- a 排尿障害
- b 下肢の激痛
- c 腓骨筋の麻痺
- d 表在感覚の脱失
- e アキレス腱反射の消失

46 60歳の男性。持続する腰痛のため来院した。数年前から時々腰痛を自覚していた。平成16年2月にゴルフの後に腰痛が出現し、近医で薬物療法と理学療法とを受けたが腰痛は軽減せず、5月からは左下肢痛も加わり増悪傾向を示したため、紹介され7月に来院した。身長165cm、体重55kg。体温36.9℃。下部腰椎に叩打痛を伴う運動痛がある。左殿部から左大腿部への放散痛はあるが歩行は可能である。Lasègueテスト両側陰性。左L₄、L₅およびS₁神経根領域に感覚鈍麻と軽度の筋力低下とを認める。血液所見：赤血球390万、Hb11.3g/dl、Ht36%、白血球7,600。血清生化学所見：総蛋白7.0g/dl、アルブミン3.5g/dl、アルカリホスファターゼ346単位(基準260以下)、Na143mEq/l、K4.3mEq/l、Cl102mEq/l、Ca11.0mg/dl、P3.0mg/dl。CRP0.9mg/dl。5月と7月との腰椎エックス線単純写真真正面像(別冊No. 27A、B)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 骨粗鬆症
- b 変形性脊椎症
- c 化膿性脊椎炎
- d 椎間板ヘルニア
- e 転移性脊椎腫瘍

別 冊
No. 27 写真A、B

47 6か月の乳児。数回続けて起こる頭部前屈発作を主訴に来院した。在胎41週、出生体重3,320g、正常分娩で出生した。生後1週ころから、肩と背部とに2～3cmの木の葉のような形の白斑が数個あることに気付かれている。頭部単純CT(別冊No. 28)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 男児のみに発症する。
- b 精神発達遅滞がみられる。
- c 口腔内に色素沈着がみられる。
- d 幼児期から顔面に血管腫が出現する。
- e 皮下結節が出現する。

別 冊
No. 28 写真

48 45歳の女性。1年前から両眼の眼球突出に気付き、最近増悪したため来院した。両側の眼瞼開大(Dalrymple徴候)と下方視で強膜上部の露出(Graefe徴候)とを認める。拍動性雑音はない。眼窩単純MRIの脂肪抑制T₁強調冠状断像(別冊No. 29)を別に示す。

眼球突出の原因で最も考えられるのはどれか。

- a 内頸動脈海綿静脈洞瘻
- b 眼窩蜂巣炎
- c 眼窩脂肪組織腫大
- d 外眼筋肥大
- e 眼窩腫瘍

別 冊
No. 29 写真

49 6歳9か月の女兒。背が低いことと元気がないこととを主訴に来院した。在胎40週、正常分娩で出生した。その後の成長発達に問題はなかった。1年半くらい前から活発さがなくなり、寒さを訴えることが多くなった。身長100 cm、体重25.0 kg。体温35.8℃。呼吸数18/分。脈拍56/分、整。血圧92/58 mmHg。血液所見：赤血球389万、Hb 10.6 g/dl、Ht 30%、白血球6,000、血小板23万。血清生化学所見：総蛋白6.7 g/dl、アルブミン4.5 g/dl、総コレステロール360 mg/dl、AST 40 単位、ALT 35 単位、LDH 350 単位(基準176~353)。顔面の写真(別冊No. 30)を別に示す。

この疾患の治療薬はどれか。

- a 成長ホルモン
- b ビタミンB₆
- c 甲状腺ホルモン
- d 活性型ビタミンD
- e 副腎皮質ステロイド薬

別 冊
No. 30 写 真

50 36歳の男性。健康診断で高脂血症を指摘され来院した。父親に心筋梗塞がある。喫煙歴はない。飲酒歴は日本酒3合/日、10年間。身長169 cm、体重85 kg。血圧136/86 mmHg。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血清生化学所見：総蛋白6.8 g/dl、アルブミン3.8 g/dl、クレアチニン0.7 mg/dl、総コレステロール189 mg/dl、トリグリセライド420 mg/dl、HDL-コレステロール31 mg/dl、AST 34 単位、ALT 56 単位。心電図に異常はない。

対応として適切なのはどれか。

- (1) 飲酒制限
- (2) 摂取エネルギー制限
- (3) 運動療法
- (4) β 遮断薬投与
- (5) HMG-CoA還元酵素阻害薬投与

- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| a (1)、(2)、(3) | b (1)、(2)、(5) | c (1)、(4)、(5) |
| d (2)、(3)、(4) | e (3)、(4)、(5) | |

51 32歳の女性。四肢と顔面との浮腫と咽頭絞扼感とのため来院した。成人後に年に1、2回、四肢特に前腕部に浮腫が出現し4、5日で消失していた。最近浮腫の出現が頻回となり、今朝から顔面の浮腫、腹痛および咽頭絞扼感が出現した。意識は清明。身長152 cm、体重41 kg。体温36.1℃。脈拍60/分、整。血圧130/80 mmHg。顔面浮腫状。眼瞼結膜に貧血はなく、眼球結膜に黄疸はない。頸部リンパ節腫脹はない。心雑音はなく、胸部でラ音を聴取しない。腹部に圧痛なく、肝を触知しない。両下腿に浮腫を認めるが、圧痕を残さない。圧痛と熱感とはない。尿所見：蛋白(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球418万、Hb 12.2 g/dl、白血球6,300、血小板18万。血清生化学所見：総蛋白6.7 g/dl、アルブミン3.7 g/dl、尿素窒素16 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、AST 25単位、ALT 35単位、LDH 233単位(基準176~353)。CRP 0.5 mg/dl。胸部エックス線写真に異常を認めない。

この患者にみられるのはどれか。

- a CH 50 低値
- b IgE 高値
- c 好塩基球増加
- d α_1 -アンチトリプシン低値
- e 免疫複合体高値

52 43歳の男性。発熱と下腿の痛みを伴うしこりとのため来院した。2か月前から夕方に38℃台の発熱、鼻汁および鼻閉が出現し、副鼻腔炎と診断された。1週間前から両下腿に有痛性の紅斑が出現した。意識は清明。身長182 cm、体重71 kg。体温37.8℃。脈拍88/分、整。血圧122/88 mmHg。眼瞼結膜に貧血はなく、眼球結膜に黄疸はない。リンパ節腫脹はない。心雑音はなく、胸部にラ音を聴取しない。肝・脾を触知しない。両下腿に径1 cmの有痛性結節性紅斑を数個認める。尿所見：蛋白2+、潜血1+。血液所見：赤血球423万、Hb 12.1 g/dl、Ht 36%、白血球10,800、血小板39万。血清生化学所見：総蛋白7.4 g/dl、クレアチニン0.7 mg/dl、AST 14単位、ALT 19単位、LDH 129単位(基準176~353)。免疫学所見：CRP 7.5 mg/dl、CH 50 60単位(基準30~40)、抗好中球細胞質抗体陽性。胸部エックス線写真で両肺に多発性の結節陰影を認める。

診断はどれか。

- a 悪性リンパ腫
- b サルコイドーシス
- c 結節性多発動脈炎
- d 半月体形成性腎炎
- e Wegener 肉芽腫症

53 35歳の女性。発熱と関節痛とのため来院した。2週前から38℃以上の間欠熱が出現している。意識は清明。身長152cm、体重41kg。体温38.1℃。脈拍84/分、整。血圧102/70mmHg。眼瞼結膜に貧血はなく、眼球結膜に黄疸はない。頸部リンパ節腫脹を認める。心雑音はない。胸部でラ音を聴取しない。肝を右肋骨弓下に2cm触知する。四肢に淡紅色の丘疹を認める。両肘、右手および両足関節に腫脹と圧痛とを認める。尿所見：蛋白(-)、潜血(-)。血液所見：赤血球418万、Hb11.2g/dl、白血球13,300、血小板33万。血清生化学所見：総蛋白6.7g/dl、アルブミン3.7g/dl、AST95単位、ALT245単位、LDH645単位(基準176~353)。CRP10.4mg/dl。胸部エックス線写真に異常を認めない。

この疾患でみられるのはどれか。

- a 低補体価
- b 好酸球増加
- c 抗核抗体陽性
- d フェリチン高値
- e リウマトイド因子陽性

54 6歳の女児。皮疹を主訴に母親に連れられて来院した。2日前から顔面に、今朝からは四肢にも皮疹が出現した。経過中、発熱はない。皮疹に痛みと痒みとはない。体温37.0℃。口腔内と頸部とに異常を認めない。顔面の写真(別冊No. 31A)と上肢の写真(別冊No. 31B)とを別に示す。

病原体はどれか。

- a A群溶連菌
- b 風疹ウイルス
- c エンテロ71ウイルス
- d ヒトヘルペスウイルス6
- e ヒトパルボウイルスB19

別 冊
No. 31 写真A、B

55 55歳の男性。開口障害を訴えて来院した。2週前に庭で古釘を足に刺したが放置していた。1週前から微熱、開口障害および肩・頸部のこわばり感が出現し悪化してきた。咽頭に異常はなく、顎関節部に疼痛と腫脹とを認めない。体温37.5℃。白血球7,400。血清アミラーゼ120単位(基準37~160)。CRP2.8mg/dl。

考えられるのはどれか。

- a 顎関節症
- b 流行性耳下腺炎
- c 副咽頭間隙腫瘍
- d 三叉神経痛
- e 破傷風

56 51歳の男性。非Hodgkinリンパ腫に対する外来化学療法を開始して12日後に、悪寒を伴う39.1℃の発熱をきたしたため入院した。意識は清明。呼吸困難と咳とはない。脈拍116/分、整。血圧110/72 mmHg。血液所見：赤血球415万、Hb 13.4 g/dl、Ht 44%、白血球1,100(桿状核好中球1%、分葉核好中球24%、単球7%、リンパ球68%)、血小板9.7万。血清生化学所見：総蛋白7.4 g/dl、アルブミン4.6 g/dl、AST 32単位、ALT 28単位、LDH 285単位(基準176~353)、Na 139 mEq/l、K 4.2 mEq/l、Cl 101 mEq/l。CRP 13.8 mg/dl。入院後、直ちに血液培養のための採血を行った。

治療薬として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 抗菌薬
- b 抗真菌薬
- c 抗ウイルス薬
- d ガンマグロブリン
- e 顆粒球コロニー刺激因子(G-CSF)

57 6か月の乳児。激しい咳を主訴に来院した。保育所に通っている。2週前から咳が徐々に強くなってきた。今朝早く、激しく咳き込んだ後、笛がなるような音がした。声が少し哑れている。呼吸数32/分。心拍数120/分。両眼瞼はやや浮腫状。心雑音を聴取しない。肺野にラ音を認めない。腹部は平坦で、肝を右肋骨弓下に2 cm触知する。脾は触知しない。咽頭は軽度発赤しており、舌圧子を入れると咳き込む。血液所見：赤血球420万、Hb 12.5 g/dl、Ht 38%、白血球20,000(桿状核好中球5%、分葉核好中球20%、単球2%、リンパ球73%)。

この疾患について正しいのはどれか。

- (1) 新生児も罹患する。
- (2) 高熱がみられる。
- (3) 咽頭側壁に偽膜が付く。
- (4) CRPは陽性になる。
- (5) ワクチンがある。

- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

58 27歳の女性。持続する咳を主訴に工場の健康管理室を受診した。患者は研究開発部門に勤務しており、外国から来日した研修生に対し、暗室で電子顕微鏡の操作を2か月前まで指導していた。この研修生は咳と微熱による体調不良で欠勤がちになり、6か月の研修期間の半分を残して帰国してしまった。その後患者自身も咳と倦怠感とを感じるようになり、夕方には37.2℃の微熱もあることに気付いた。身長160 cm、体重42 kg。呼吸数24/分。脈拍84/分、整。胸部聴診では異常所見はない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤沈42 mm/1時間、赤血球430万、白血球8,800、血小板30万。血清生化学所見：総蛋白6.4 g/dl、尿素窒素16 mg/dl、クレアチニン1.0 mg/dl、AST 28単位、ALT 32単位、Na 144 mEq/l、K 3.7 mEq/l、Cl 100 mEq/l。免疫学所見：ツベルクリン反応14×12/28×25、CRP 2.0 mg/dl。喀痰塗抹検査で1視野に数個の抗酸菌を認める。胸部エックス線写真で左上肺野に径2 cmの辺縁不鮮明な陰影を認める。

医師の対応として適切でないのはどれか。

- a 患者への入院指示
- b 保健所への届け出
- c 勤務職場の消毒指示
- d 労働災害補償保険の申請指導
- e 職場同僚の胸部エックス線撮影指示

59 32歳の男性。嘔吐、腹痛および下痢を主訴に来院した。5月の連休中、1泊旅行した帰途、朝食後3時間で悪心、嘔吐、腹痛および下痢が突然始まった。体温37.1℃。脈拍88/分、整。血圧118/68 mmHg。心・肺に異常所見を認めない。腹部は平坦、軟で、圧痛を認める。肝・脾を触知しない。神経学的所見に異常を認めない。尿所見：蛋白(－)、糖(－)。血液所見：赤血球550万、Hb 17.0 g/dl、白血球8,000、血小板35万。血清生化学所見：総蛋白7.0 g/dl、クレアチニン1.0 mg/dl、総ビリルビン0.8 mg/dl、AST 38単位、ALT 32単位、γ-GTP 40単位(基準8～50)、Na 145 mEq/l、K 4.0 mEq/l、Cl 102 mEq/l。CRP 0.2 mg/dl。輸液を行い帰宅させた。2日後に再来院した時点で症状は軽快していた。

原因として最も可能性が高いのはどれか。

- a きのこと毒
- b 腸炎ビブリオ
- c 黄色ブドウ球菌
- d インフルエンザ
- e 小型球形ウイルス

60 36歳の女性。1か月前からの全身倦怠感を主訴として来院した。大学卒業後、24歳で結婚し、主婦をしている。15歳時、交通事故で輸血を受けた。喫煙は24歳から1日15本。飲酒は30歳から夕食時ビール小ビン1本/日。身長160 cm、体重45 kg。体温36.4℃。呼吸数22/分。脈拍68/分、整。血圧128/76 mmHg。胸部と腹部とに異常所見はない。尿所見：蛋白(－)、糖(－)。血液所見：赤血球380万、Hb 12.1 g/dl、Ht 35%、白血球8,200、血小板20万。血清生化学所見：空腹時血糖80 mg/dl、総蛋白7.6 g/dl、アルブミン3.9 mg/dl、総ビリルビン1.0 mg/dl、直接ビリルビン0.6 mg/dl、AST 150単位、ALT 180単位。胸部エックス線写真と上部消化管造影写真とに異常を認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 肺結核
- b 慢性肝炎
- c 慢性胃炎
- d 鉄欠乏性貧血
- e ストレス関連障害

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受 験 番 号	氏 名 (楷 書 で 書 く こ と)